

之名宜在百合若薺莨條、莠宜與商陸合也、或曰文字集略以下別是一條、傳寫脫標目莠字也、今本併在草條下、非源君之舊也、愚按似不當以其物不詳之佐歧久佐次于蘭菊之上、是說恐非是、

〔類聚名義抄〕八莠音娘サキクサ

〔倭訓栞〕前編十さいぐさ 日本紀に福草と書る本義成べし、さきくさともいへり、諸書に三枝を

よめるは、義訓せしなり、延喜式に、朱草の別名とし、瑞草也といへり、中倭名鈔に薺莨さきくさ、一に云みのはと見えたり、みのは、はつはに同じ、呂氏春秋にも、三葉薺と見ゆ、中萬葉集抄に、檜は宮木などにも、撰み用ゐられて、さいはふ木なれば、さきくさといふよし見えたり、古今集の序に、殿づくりより謬り傳へたる説なるべし、顯昭説に、三枝はからすあふぎ也、彼草末葉廣ければ、祝ひによすといへるも、いかゞと覺侍る、

〔新撰姓氏錄〕左京神別三枝部連

額田部湯坐同祖顯宗天皇御世、喚集諸氏人等、賜饗醢、于時三莖之草生於宮庭、採以奉獻、仍負姓三枝部造、

〔日本書紀〕十五三年四月戊辰、置福草部、

〔延喜式〕治部二十一祥瑞 福草瑞草也、朱草別名也、生宗廟中 右上瑞

〔萬葉集〕五戀男子名古日歌三首長一首、短二首

夕星乃由布弊爾奈禮婆伊射禰余登手乎多豆佐波里父母毛表者奈佐我利三枝之中爾乎禰牟登

愛久志我可多良倍婆略

〔古今和歌集〕序歌のさまむつなり、中むつにはいはひ、

このとのはむべもとみけりさきくさのみつばよつ葉にとのづくりせり、といへるなるべし、

〔令義解〕神祇凡略孟夏中三枝祭謂率川社祭也、以三枝花飾酒樽祭、故曰三枝也